
流星群の夜

生クリーム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星群の夜

【Nコード】

N1985B

【作者名】

生クリーム

【あらすじ】

幼い頃から共に育った彼女。流星群と一緒に見た夜、僕は彼女に言った。「世界の果て」まで行こう——しかし僕は、その言葉を後悔している。

「まだ行かないの？」

休み時間。教室で談話するクラスメートにはわき目も振らず、彼女が僕の所にやって来た。僕は頭を抱えてしまった。

「あのさ、行かないとは言って無いだろ。だから休み時間毎に、僕の所まで来るのは止めるよ」

僕はなるべく邪険な雰囲気にならないよう、努めて柔和な口調で言ってみる。

すると案の定、彼女は口を尖らせた。

「一週間、そればかりじゃない。もう行く気が無いんですよ」

「……実はそうなんです、って言ったら？」

「私は、あなたが一度言った事はやり通す人間だって事、知ってるわ」

彼女はそれだけ言うと、身を翻して最後に言った。

「じゃあ、また後で」

僕は机に突っ伏して、颯爽と去り行く彼女の背中に、そっと呟いた。

「恐縮です……」

あれは一週間前の事だ。地学の授業中、教師は言った。

「今夜の明け方、多分二ワトリ座流星群が見られると思いますよ。

皆さんは運が良い。これ程見事な流星群は、もう二度と見る事はないでしょう」

この言葉に教室は色めき立った。女子などは、キヤーキヤー騒いでいたと思う。

天文学が好きな僕としては、ニワトリ座流星群の事など随分前から知っていた。むしろ僕だけの秘密をバラされたような気がして、面白くなかった。

そして休み時間。彼女は僕に言った。

「ニワトリ座流星群を見てみない？」

僕は言った。

「いいよ」

そしてその夜。僕は彼女と一緒に、寮の屋根に登ってニワトリ座流星群を見た。みんなは寝てしまったのだろう。あれだけ騒いでいたクラスメートは、誰一人と来ていなかった。

「綺麗ね……」

僕達の方へと降って来るような流れ星を前に、彼女は言った。

「ああ……」

僕は上の空で頷き返す。

「願い事がいくつも叶いそうね」

「ああ……」

僕はやっぱり上の空だった。

「”世界の果て”って知っているか？」

しばらくして、僕は口を開いた。

「”世界の果て”？」

「ああ。そこは星の墓場なんだって。過去の流れ星が全部あるんだ。この流れ星達も、そこへ向かっているらしい」

これは嘘じゃない。過去にも、何人かの探検家が辿り着いたとか。そして僕は言った。

「一緒に”世界の果て”まで行ってみないか？」

そう。あれは流星群を見て興奮していた僕の口が勝手に言った、あそこで言うべき事ではない内容のものだ。

しかし彼女は、瞳を輝かせて言った。

「……行ってみたい。連れて行ってくれる？」

あの時点で断っておけば良かった。しかし彼女の表情を見ている内に、僕はつい言ってしまった。

「いいよ。連れて行ってやる」

しまった、と思った時はもう後の祭り。僕は多いに後悔してしまった。

そして今に至る。

彼女は、この一週間いつもそうだったように、休み時間毎に僕の所まで来た。

「今日行くの？」

「すぐには行けない」

「準備は？ 何かいる物はある？」

「後で言うよ」

「それとも明日行く？」

「今週中は無理かも」

互いに引かない押し問答が続く。こうやって一日は過ぎて言った。

それにしても、ここは息が詰まる。人里離れた山奥に、ポツンと建てられた寄宿学校。特待生として奨学金で通っている僕は、文句は言えない。しかし、まるで監獄のような息苦しさだ。

僕はあの提案を断る理由を考えてはいるが、別に”世界の果て”

へ行きたくないわけではない。準備も彼女の分も含め、既にしてある。

要は僕の度胸の問題なのだ。僕に度胸という物があれば、こんな所はとつくに飛び出ているだろう。しかし、それは出来ない。

ただ、あの話をするのが早過ぎた。それだけの事だ。

——トントン——

夜。寮の自室にて。扉をノックする音が聞こえた。

「どうぞ」

僕の声が届いたのだろう。すぐに扉を開く音がして、足音がそれに続く。

振り返った僕の目に移ったのは、私服に着替えた彼女。僕は慌てて、机の上に散らばっていた本や雑誌を片付けた。

「な、何してるんだよ。ここは男子寮だぞ」

しかし彼女は、ちっとも悪びれずに言った。

「あら、それ位知っているわ。あなたが重い腰を上げないから催促しに来たのよ」

僕は思わず溜め息を吐いた。そして言うなら今だ、と決心する。

「あのさ、言い始めたのは僕だけど、考えてみなよ。僕達はまだ学生だ。まだ時間はあるじゃないか。何故今なのさ」

僕は、心の中で彼女に謝った。悪いのは僕なのだ。

彼女はしばらく黙っていたが、やがてポツリと言った。「今じゃなきやダメなの」

「何で？」

「今じゃなきやダメなの」

彼女は先程と同じ言葉を、先程より少し強めて言った。僕はさすがに聞き返す。

「何だよ。一体どうしたんだよ」

そして彼女は語り出した。

「あなたには言っていなかったけど。私、孤児院を出る事になったの」

「え？」

突然の告白に、僕は一瞬フリーズしてしまった。

彼女の言った孤児院とは、孤児である僕達が一緒に育った孤児院の事だ。

機能が回復しつつある頭で、彼女の言葉を反芻してみた。

孤児院を出るという事。それはつまり――

「春に孤児院に帰省した時に、私と会ってみたいっていう人がいたの。実際に会ってみただけど、イヤな感じの夫婦だったわ。私が死んだ娘に似ているんですって」

僕が何も言わないからだろう。彼女は聞いてもない事を話し出した。

「それで二週間前、孤児院から手紙が来たわ。私が正式にあの夫婦の子供になるって事」

「じゃあ学校は？ 変わるのか？」

僕は、ようやくそれだけ言った。彼女は肩をすくめると、呆れたように話し出す。

「当たり前でしょ。その夫婦の家は、孤児院からもここからも、ずっと遠い所にあるのよ。明日には迎えが来るわ。あなたに会うのも、これが最後かも知れない」

僕は言葉が出なかった。僕の知らない所で話が決まっていたのが悔しかった。

しかし何よりも、もう彼女に会えないかも知れないという事実の方が、衝撃的だった。

「何でそんな大事な事を言わなかったんだよ」

僕はなるべく邪険な雰囲気にならないよう、努めて柔和な口調で言おうとした。しかし、出来なかった。

僕の言葉に、彼女は睫を伏せる。僕は少しだけ後悔した。

「言おうと思っただわよ。何回も。でも……」

ここで彼女は言葉を切った。そして顔を上げ、僕の方を見据える。

「あなたが”世界の果て”へ行こう、と言ってくれたから」

僕は、ようやく分かった。あの時、あの流星群の下で、彼女がなんにも瞳を輝かせていた理由を。一週間、休み時間毎に僕の机まで来ていた理由を。

しばらく部屋の中には、沈黙が漂っていた。そして彼女は言った。「分かったわ。私ももう諦める。本当は行きたかったけど……。さようなら。あなたの事、忘れない」

彼女はそれだけ言うつと、踵を返してドアへと歩き出す。遠ざかる彼女は、ゆっくりと見えた。

突然僕の心に、ある情景が浮かんで来た。それは幼かった頃、彼女と過ごした日々の思い出だ。

僕はいつも苛められていた。僕には度胸が無かったのだ。そんな僕を、彼女はいつも励ましてくれた。

そう僕に足りないのは、そして僕が欲しいのは度胸——
僕は決心した。

「待てよ！」

気が付けば、僕は叫んでいた。振り返った彼女の目に浮かんでいた涙に戸惑いながらも、僕は言う。

「分かった。今すぐにここを出よう」

すると彼女は、驚いた顔をした。

「えっ……。でも……」

僕は椅子から立ち上がって部屋の隅へと行き、本に埋もれていた

二つのリュックを引っ張り出した。

「ほら、準備はしてある。今は夜だから、抜け出してもバレないさ」
僕はリュックに付着していた埃を払って、その一つを彼女に渡した。その埃が、リュックが長い間あそこにあったという事を物語っている。

「ごめん……。僕が悪かった。僕には度胸が足りなかったんだ」
そつと彼女の顔を伺うと、そこには笑顔があった。

「ええ、知っているわ。伊達に何年も一緒にいたわけではないもの」
僕は、彼女に手を差し伸べた。その手を、彼女がしっかりと取る。今なら何でも出来る気がした。

「”世界の果て”へ行こう」

僕達は、夜の世界へと旅立った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1985b/>

流星群の夜

2010年10月8日15時31分発行